

業界紙に、^{たちいっせい}城一生主宰の『シューフィルザッツ』というフリーペーパーがあった。当時群を抜いた編集の良さから大好きな業界紙であった。

好評だったにもかかわらず、3年ぐらいで休刊してしまっただから、惜しまれてならない。

巻末に《語り継ぐ浅草》という特集コーナーがあって、業界人それぞれの戦後史が語られていて、楽しい連載の一つであった。

インタビュー記事に、私の記事が掲載されたことがあり、以下に紹介しておきたい。

《語り継ぐ浅草》『シューフィルザッツ第8号』
2007(平成19)年11月1日(写真参照)

焼け跡のバラックに積まれた革

私は、国民学校高等科を卒業すると、学校の推薦で、第六陸軍技術研究所に入所、敗戦まで毒ガスの研究所にいました。

戦後は復員した兄が旋盤工をやっており、見習いとしてそこに入り、夜は社会党が経営していた労働学校に通ったりしていたんですが、母方の義理の叔父がワシントン靴店の作業部長だった人で、復員したが復社せず、自分で靴メーカーを始め、おまえも来ないかと、それが私の靴業界の始まり、昭和22年のことです。

叔父のメーカーは、ゴールデンシューズというネームで、婦人靴を作っていました。製甲の見習いから始めました。住み込みで食べて寝て、休みは1日、15日の月に2回、給料はなくて小遣いをもらう程度。昔はこういう徒弟制度で仕事を覚えた訳だ

けど、私なんかはその最後に近いんでしょね。

物が無い時代でしょ。仕事は、製甲の折り込みに使うゴム糊づくりなんかもやったね。生ゴムを刻んで一升瓶に入れて、そこに溶剤を入れて振るんです。昔は盤石糊ばんじやくのりを使っていたそうですが、大正時代、ロシアに輸出した靴が、船で輸送中にカビが出て、クレームになった。それが原因だったんでしょ、ゴム糊に代わったと聞いている。

もちろん統制の時代、でも革はあった。聖天町(現在の浅草六丁目)の焼け残った蔵いんやバラックには一杯積んでありました。隠いん退蔵物資たいざうぶつしの摘発が流行みたいになっていたから、規制が厳しくなる前に在庫したものを売り惜しんだか、統制品は統制組合が配給していたんでしょ。配給品はまったく当てにしていまませんでした。

2007(平成19)年11月1日 第8号

昭和20・30年代

間ロー間・奥行き半間足らず、それでも銀座の繁盛店。作れば作るだけ売れました。




稲川 實さん

昭和20年代の浅草、焼け跡のバラックに積まれた革。この頃、製甲の見習いから始めました。住み込みで食べて寝て、休みは1日、15日の月に2回、給料はなくて小遣いをもらう程度。昔はこういう徒弟制度で仕事を覚えた訳だ